

2号館玄関前で（ゲートルを巻いた姿）

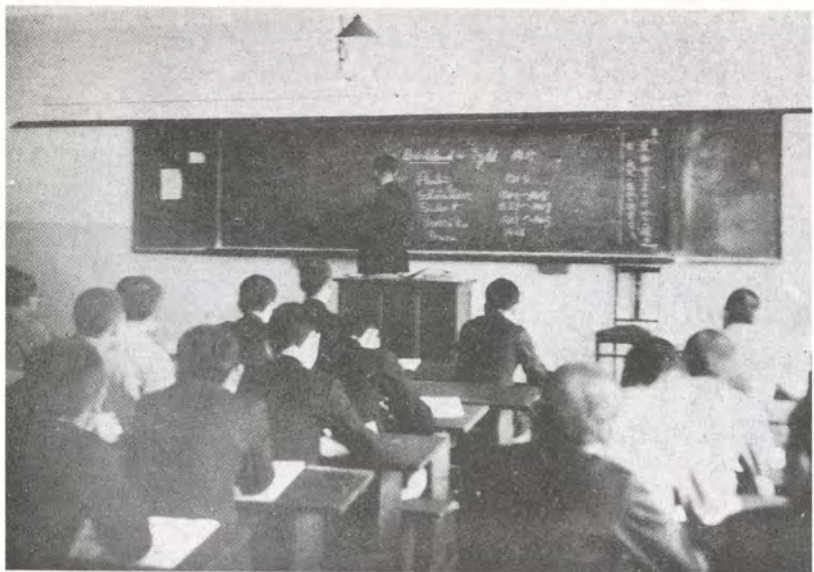
昭和17年頃

今は山の上ホテルになっている。安い昼飯をよく喰べました。

現在の山の上ホテルの喫茶部のある位置に生活館食堂の看板がかかり、昼食をよく食べたものである。かなり安かったように思う。



防空消火訓練（2号館）



授業風景



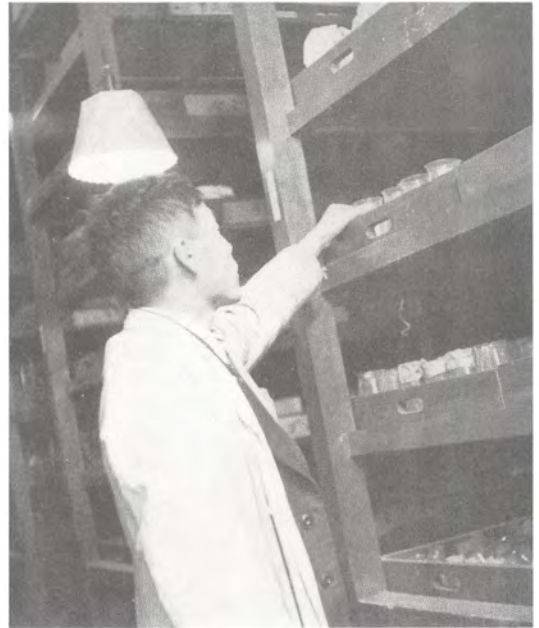
生活館食堂（現在の山の上ホテル）

配給室のあった時代 (昭和16年～昭和20年)

2号館玄関を入ってすぐ右側の部屋の隅に、配給室と称する部屋があった。工業化学科が創立して終戦までの頃の話である。配給室の中には、写真Aのようにたくさんの棚が並んでおり、そこにはピーカ、フラスコ、ルツボ、吸引ビン、ビューレットをはじめ多種類の実験器具が多数保管されていて、分析実験や工化実験などの共通実験器具を必要に応じて学生に補給していた。所定の伝票に器具名を記入し、先生の印をもらってこれを受付窓口に出し、現品を受取った(写真B)という。器具の整理や窓口で渡す仕事はアルバイト学生2名があたり、その責任者であったのが野沢都さんである。野沢さんは昭和16年から18年頃までおられたそうで、その後ご結婚され、現在もご健在である。野沢さん(現在岡野さん)は周囲の方々はいい人ばかりで大変楽しかったと当時のことを述懐されている。

配給室より実験器具を学生に渡す方法は、終戦迄続いたことになる。しかし、終戦前頃のある時期は学生が勤労働員でかり出されたため、学生実験は事実上中断状態であったという。

この配給室は、昭和30年代に改装され、当時の受付窓口もなくなり、部屋の内部も壁で仕切られて、現在は分析化学実験の準備室となっている。



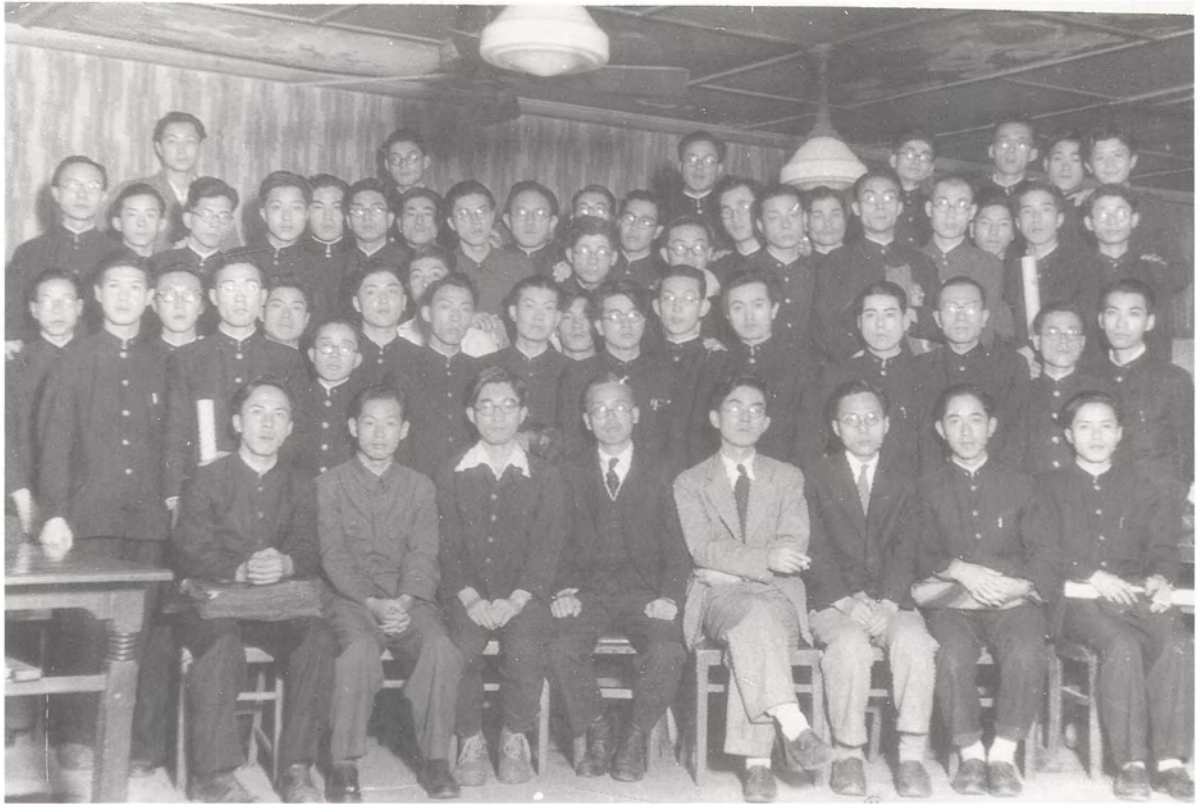
A. 配給室内の物品整理、保存棚



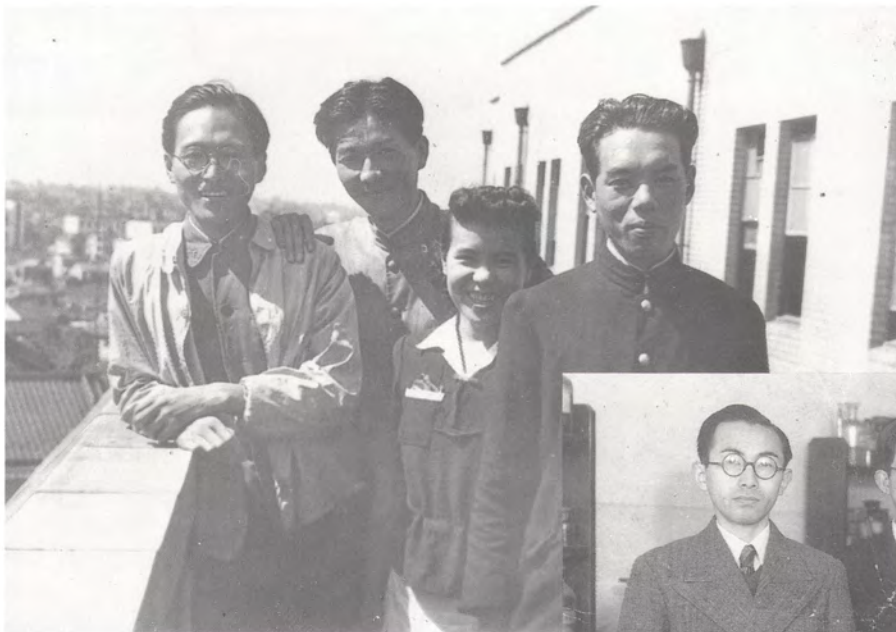
B. 配給室受付窓口



野沢 都 さん



昭和22年9月30日 旧制7期生の卒業式



2号館2階ベランダにて
左より笠井, 斎藤, 横倉, 黒田
(昭和21年頃)



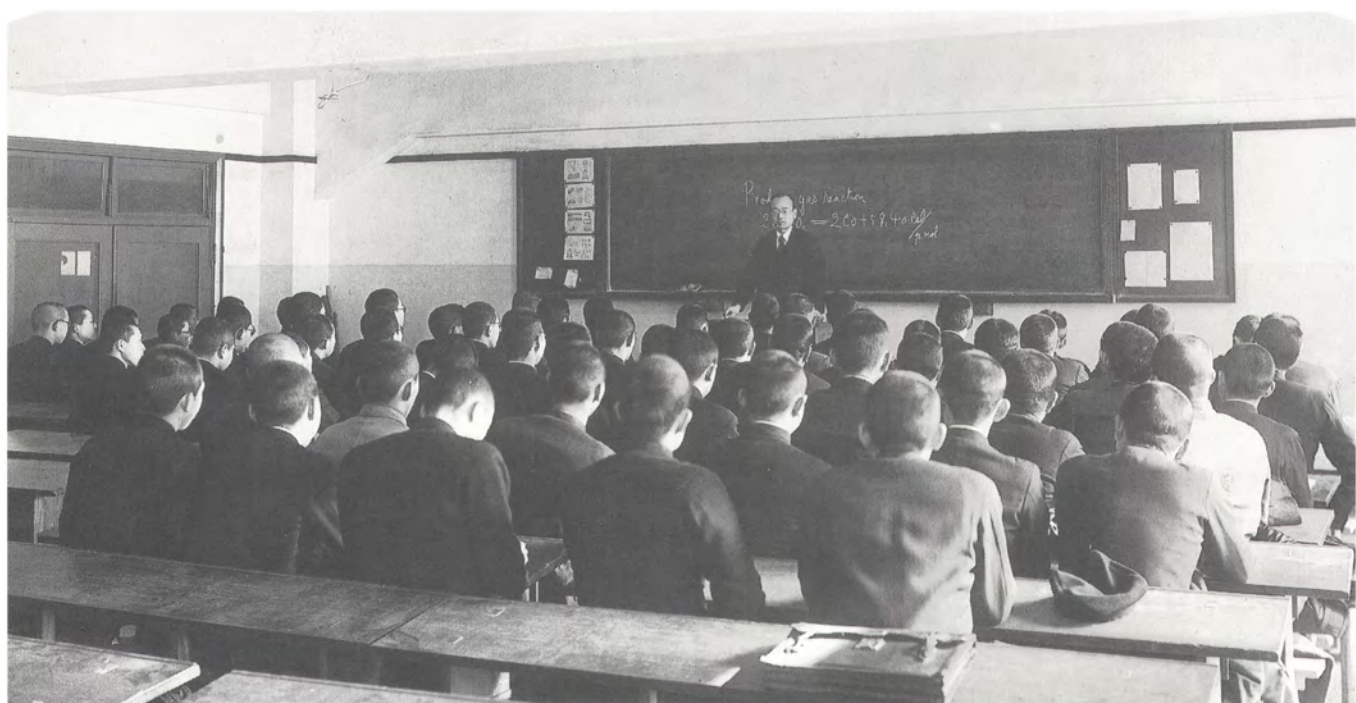
左より穴沢, 玉置, 笠井の各先生 (昭和21年頃)



ニコライ堂の近く、学部1年
旧制6期生が学部1年の頃ニコライ堂の
近くで写す。(ゲートルをつけている)
昭和18~19年頃



昭和18~19年頃、ゲートル姿の旧制6期生



市川先生の燃料化学授業風景（昭和21年頃）
写真撮影のため机をつないで、全員写るようにした。通常は1つ
の机に2名位座って授業をうけたものです。



卒業式後の記念撮影（お茶の水橋対岸、昭和21年9月30日）
 右より中島一好、齋藤光平、黒田登、平井（市辺）貞三、
 笠井順一、下河原一恵



旧法文学部講堂前で、卒業式後に写す。
 右より米子稔、坂田達三郎、笠井順一、
 中村芳彦、八巻康世

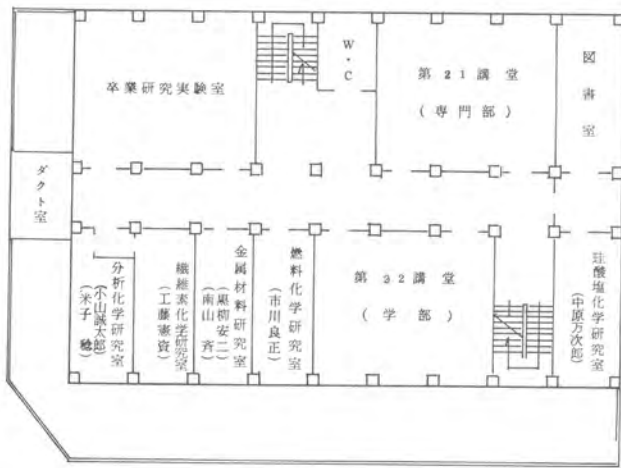


2号館2階ベランダで、喜びにみちて卒業証書を見る。
 右より黒田登、笠井順一、中村芳彦、齋藤喜久蔵、
 塚本三郎、米子稔

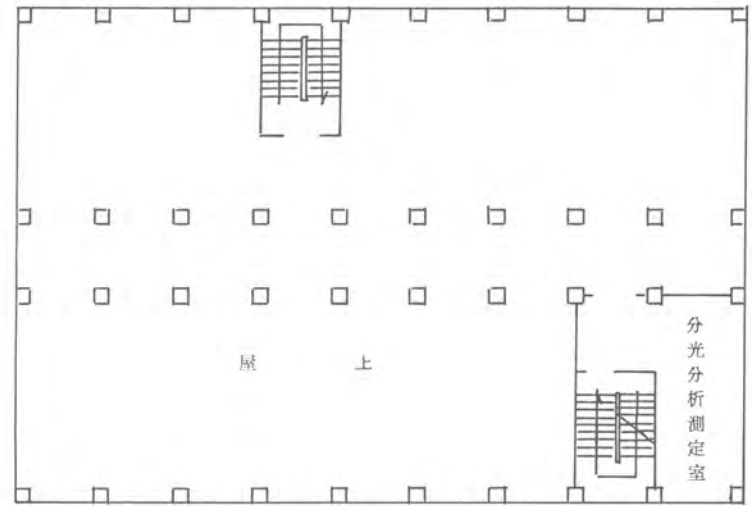
駿河台校舎 2号館

(終戦前後)

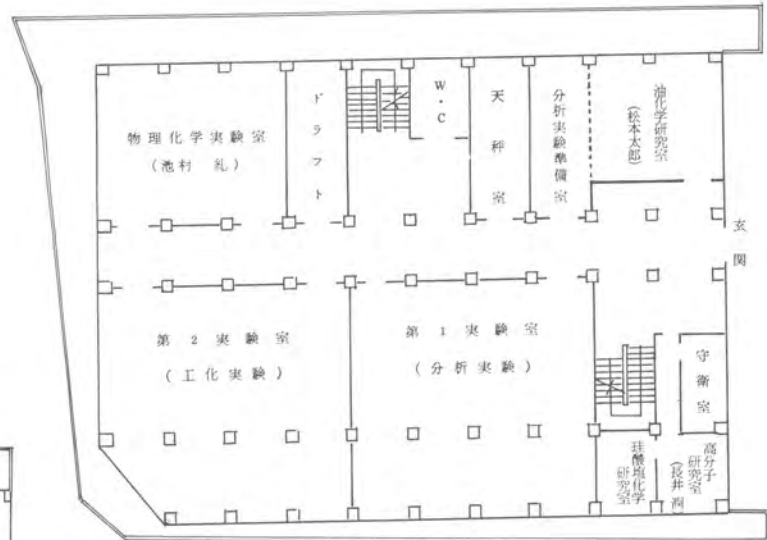
昭和16年当時、2号館2階には講堂が2部屋、卒業研究専用の実験室（大部屋）があり、角には工化図書室があった。
現在の2号館3階は屋上で、角の踊場に一時期分光分析測定室があった。



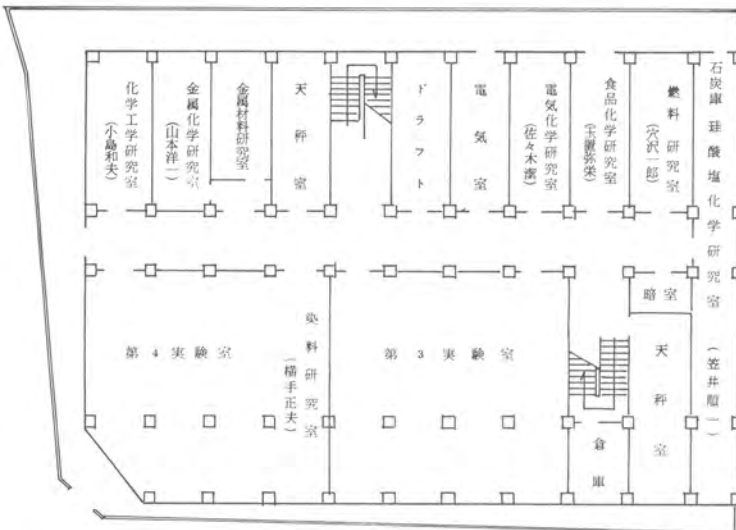
2号館2階



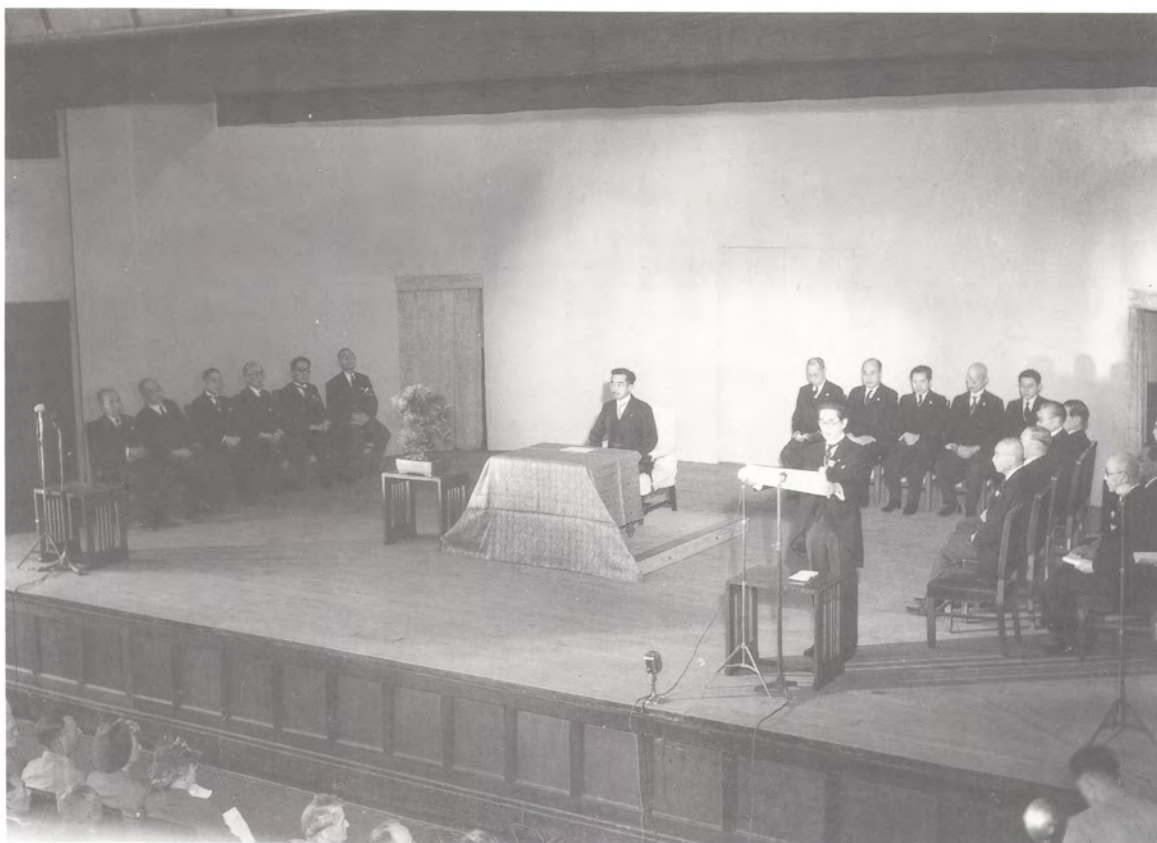
2号館屋上（現在の2号館の3階）



2号館1階

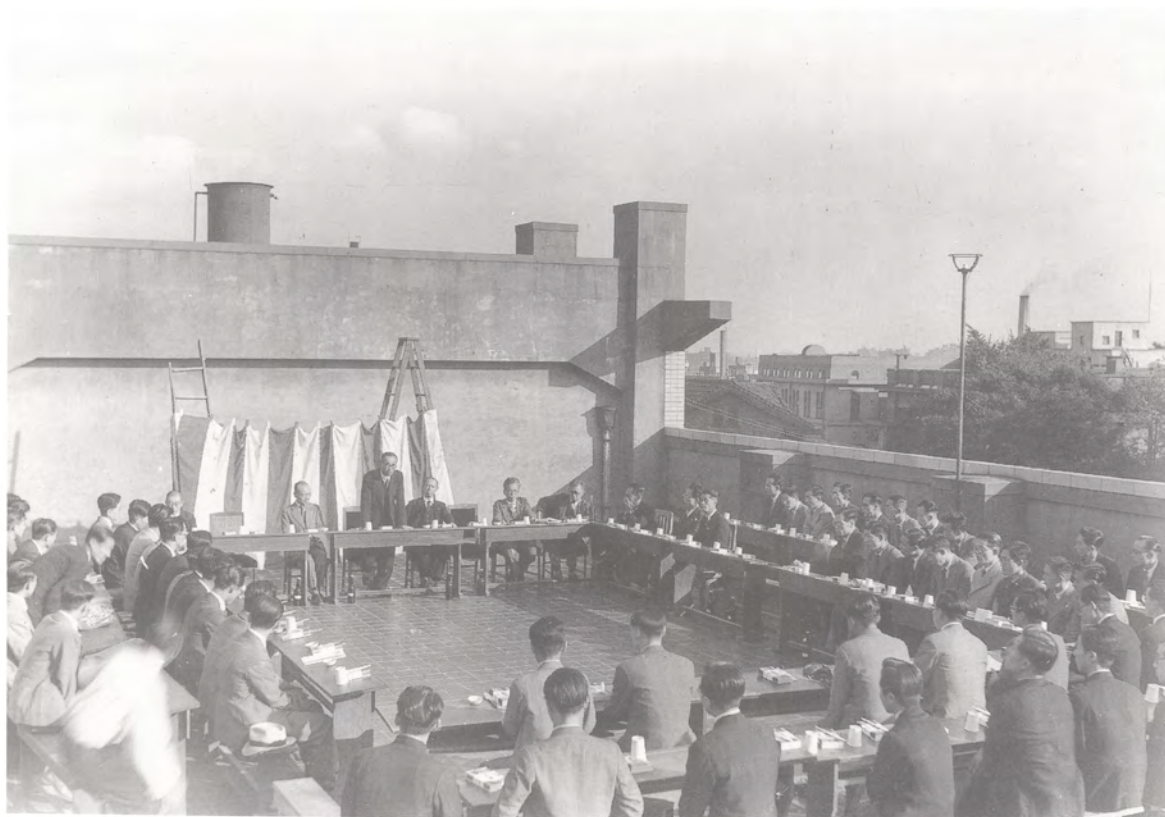


2号館地階



日本大学創立60周年記念式典（日本大学本部 昭和24年）

天皇陛下の御臨席のもとに、60周年記念式典が行なわれた。壇上には文部大臣、早稲田大学総長、慶応大学塾長その他多くの方々のお顔がみられる。日本大学総長は呉文炳博士。



日本大学工学部工業化学科創立10周年記念祝賀会（昭和24年）

駿河台2号館屋上 永井、西川、工藤、山本、松本、畑、その他の各先生方及び工化卒業生が多数出席された。



専門部工科、工業化学科8回生(昭和23年)

工業化学科 (専門部) 有志学生による英会話 の練習

終戦後、山の上ホテルは一時進駐軍に接収され、米国女子将校の宿舎となった。昭和22～23年頃の専工の工業化学科学生有志は、女子将校を招き2号館の22講堂で英会話の練習に励んだといわれる。

上の写真は、その女子将校ミス・ケントをかこんでの記念撮影である。

下の写真は、英会話がきっかけで米国軍人のクリスマスパーティに招かれたときのものと推定される。場所は残念ながら不明である。



小山先生の思い出

穴 沢 一 郎 生産工学部教授

先生は昭和17年10月、予科を戦時繰りあげ卒業した新1年生の工業分析化学の講師として着任された。当時先生は陸軍技術研究所に勤務されていたが、常勤同様終日熱心に指導して下さった。戦後昭和21年に改めて本学助教授に就任され、実験棟の管理責任を命ぜられ、私はその補助者としてお手伝いした。当時戦争で荒れた館内整備の費用獲得の為、実験室の一部を企業数社に貸し、会計を私が担当し、先生は業者との折衝から営繕と、熱心に当られた。戦後日本にも労働組合が次々と結成され、大学にもこの風潮が押し寄せ、熱

血漢の先生には教職員組合の結成に奔走されましたが、この運動は結実を見ずに、昭和27年先生には本学を辞され、新潟大学に迎えられました。熱心な教育者であられた先生を惜しむ声多く、先生のその後を案じ申しておりましたが、間もなく“放射能の雨”測定で先生の名は全国を馳せ、吾々は先生の健在振りを喜んだものでした。先生は敬謙なクリスチャンであられたようで、また子煩悩、学生との懇親会で指名されるや直立不動で童謡を歌われた真面目先生の姿が今も目に浮かびます。



前列左より
皆川、畦元、()、稲垣、小山、市川、永井、黒柳、工藤、横手、松本、穴沢、笠井、米子
の各先生

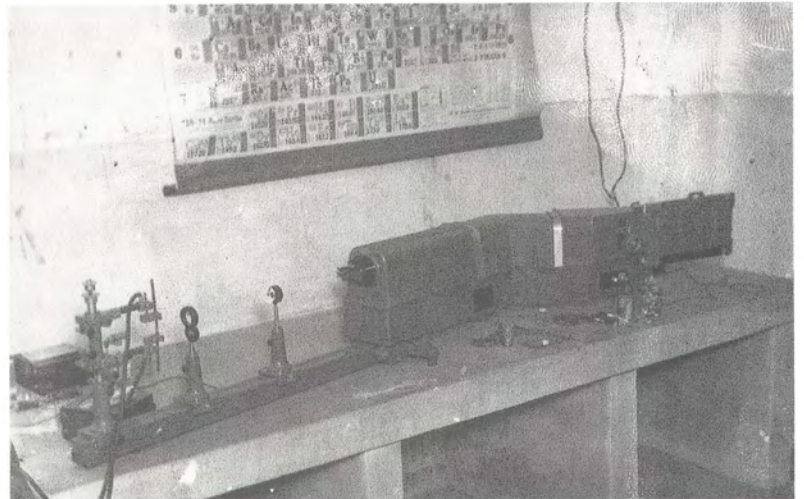


左より池村助手, 小山助教授, 米子助手, 学生



左より
学生, 松本, 小山, 池村, 穴沢, 米子, 学生
学生, 笠井, 伊藤の各先生

島津 Q F 60型
分光分析装置
昭和25年頃



大学卒の初任給が約6000円位であった当時島津Q F 60型の分光分析装置は 100万円位であったという。当時では最新の機器であるが、かなり高価なものであったことが伺われる。大学では購入資金に苦勞したという。

この装置は、2号館屋上（現在の3階）の片隅に小さな部屋がつけられ、設置された。小山先生はこの機器を用いて「化学探鋇法」に関する研究をされていたと聞く。終戦数年後の頃で、軍服を着て軍靴で2号館内を忙しく行き来しておられた小山先生の姿が今でも強く印象に残る。教育熱心な情熱あふれる先生であった。



島津 Q F 60型分光分析装置
昭和25年頃

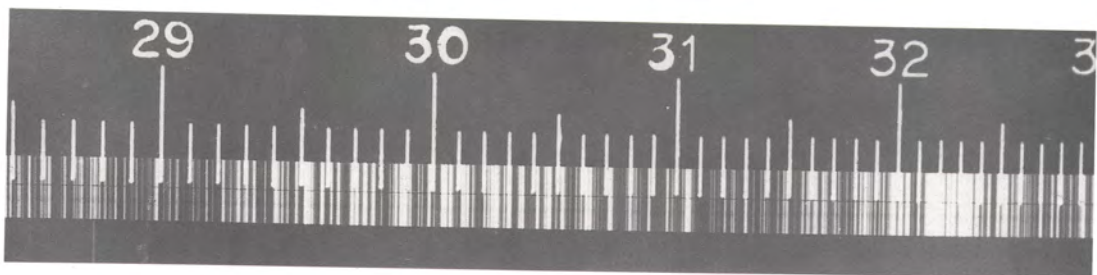


伊豆大島の三原山の爆発(噴火)
昭和26年 3月



溶岩採取

発光分光分析装置を用いて卒業研究を行っている学生が研修旅行で伊豆大島を訪れたとき、三原山の爆発に遭遇した。右の写真は流れてきた溶岩に棒を突込み、溶岩を採取しているところである。大学に持帰り分光分析した結果が下の写真である。





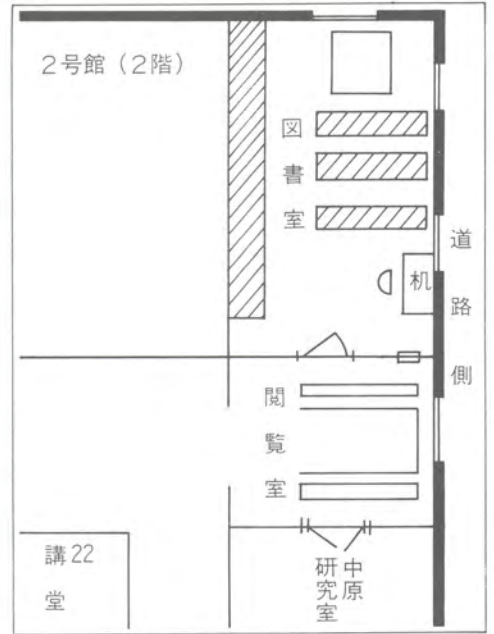
小山先生の御挨拶（昭和26年）



昭和27年に、新潟大学
理学部に赴任された。



小山先生の送別会（昭和26年）



昭和23年頃の工化図書室

2号館に図書室があったのは、昭和23年～昭和34年までである。2号館2階の道路側に面した部屋で、現在は無機工業化学研究室になっている。昭和23年以前は専門部関係の先生方の部屋で、黒柳、横手、五来先生その他の関係者が出入りしていたという。戦後、工学部図書館（現在主婦の友お茶の水スクエアC館の建っている場所）では2号館から離れているので不便だという理由で、図書館より化学関係の雑誌や単行本を2号館に運び、工業化学科図書室をつくった。その当時は小山助教授がその責任者であった。昭和23年当時の蔵書はChemical Abstract, Chemisches Zentralblatt, Chemical Engineering, JACSをはじめ、多くの雑誌やGmelin, Mellorの無機化学系Beilstein, Ullmannなどの有機化学系のハンドブックや辞書が部屋の壁側の書棚に並び、邦文の単行本は部屋の中央の6本の書棚に並べられていた。バックナンバーにはあちこち欠本があり、小山先生は神保町の古本屋街によく出かけられ、みつけては、これを補充されていた。部屋の入口の隅に本の貸出しに使う小窓があった。中原先生の部屋の前に机と椅子を置き、ここを学生の閲覧室として使用していた。図書室の奥にも机があり、この場所での閲覧は教員に限られていた。またこの頃は2号館に会議室がなかったので、助手会などにもこ

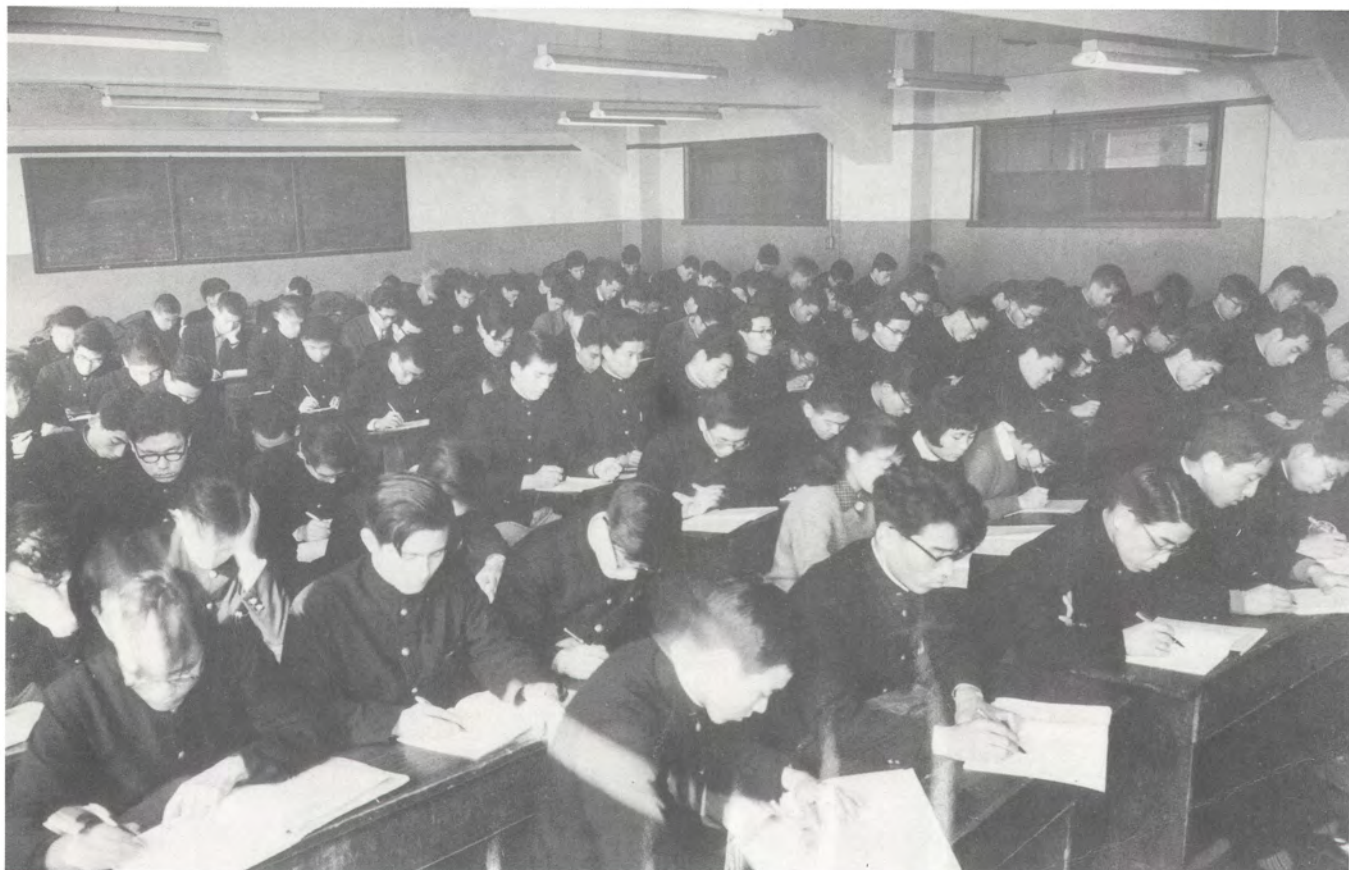
の場所が利用されてた。その頃卒業研究をしていたKさんは毎日のように図書室にやってきて「Farben Chemie」を借してくれと大きな声で私に声をかけた。横手先生の研究室の所属で、ドイツ語の本を読みこなす人だったようであった。当時、初代の図書係をしていた私の脳裡に強く印象に残っている先輩の一人である。笠井先生の部屋には戦争中海軍少佐であった学生のFさんも忘れることができない。大変落ち着いた、なる程軍人だったのかな……と思わせる方で、勉強家であったように思う。

昭和23年～24年頃の学生は、戦争中の陸軍士官学校や海軍兵学校に在籍した経歴をもつ人が多く、自然クラス全体が活気に満ち“元気そのもの”といった感じが強かった。しかし、反面現在とは比べものにならない位、勉強熱心で、授業中は大変静かだったし、雑談する人はいなかった。どの授業でも講義の終りには、学生全員が拍手をして先生を慰労(?)したもので、あの頃は先生と学生との心のつながりが、現在よりはるかに強かった時代である。

昭和35年頃、この図書室の本は全て工学部図書館に返却され、この部屋は笠井先生の研究室になった。

(上野敦行)

授 業

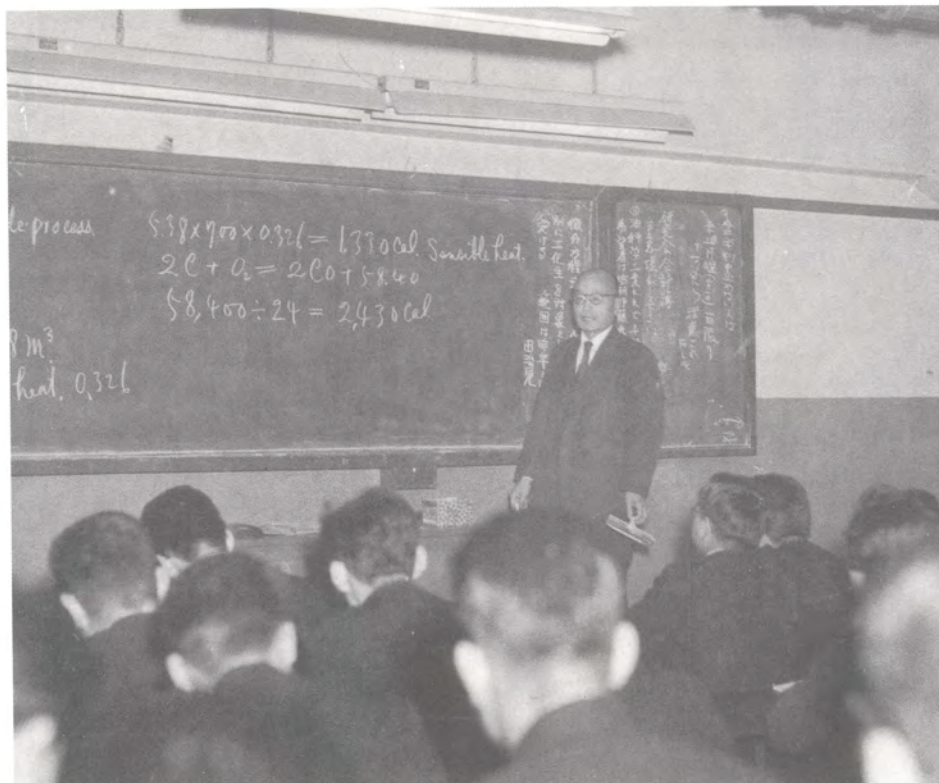


教養課程を終えて駿河台校舎へ移行してきた当初の2年次は1号館での授業が殆んどであったが、3年次からは2号館の2階の22講堂で行なわれていた。22講堂は昭和40年、8号館の建設による教室・実験室の増設に伴って改造され、現在の就職事務室と分析化学研究室とに分割された。

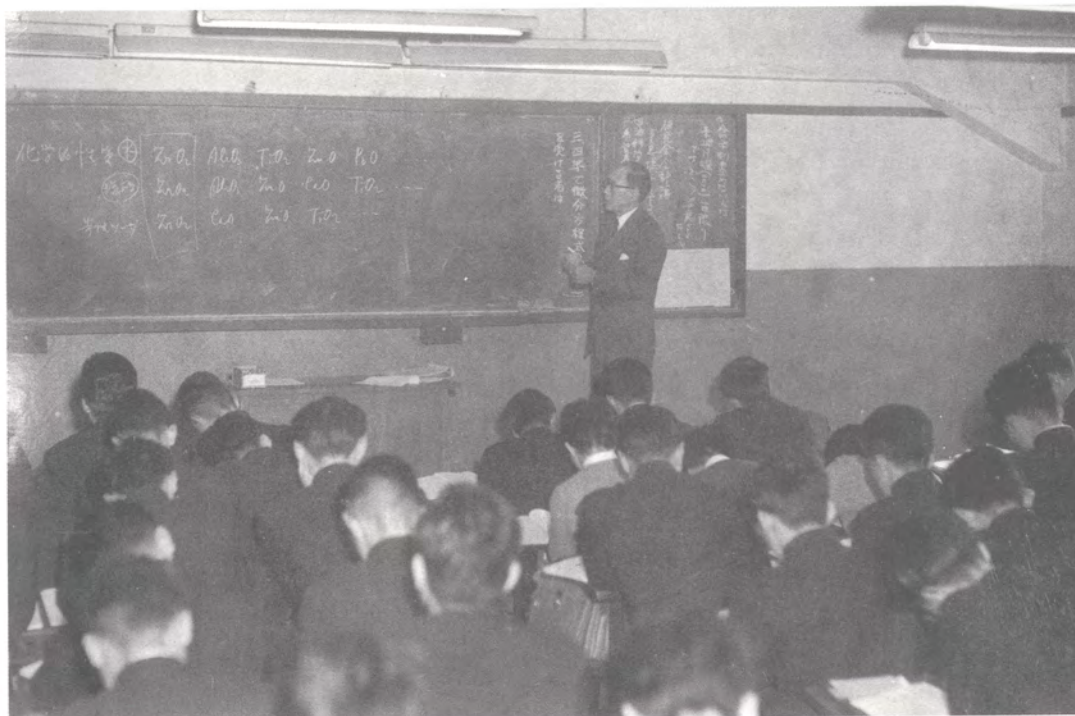


教室の前と後に設けられた黒板は毎週演習の解答で埋め尽された。当時は苦痛の連続であったが、今は懐しい思い出。

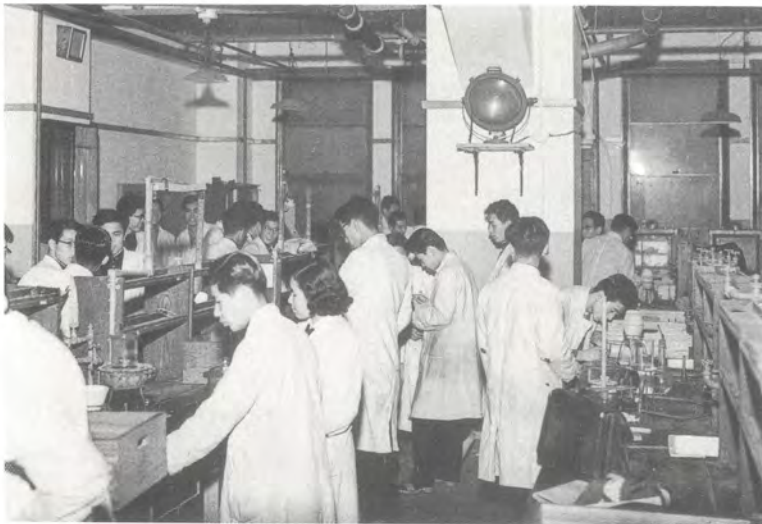
風景



22講堂で「燃料化学」を講義されている市川良正教授



「珪酸塩化学」を講義されている中原万次郎教授



2号館1階 工化実験室

昭和32年頃の 工業化学実験風景



床屋の大場さん

“籐巻きびん”

イオン交換樹脂を用いて純水をつくる方法が学生実験にとり入れられたのは、何時頃なのかははっきりしない。

イオン交換樹脂が普及する前は、電熱を用いて水を蒸留する“蒸留水製造器”が主役で、蒸留した水は“籐巻きびん”に入れてもち運びをした。一・二部の学生実験が続く日は、能率の悪いこの装置では需要量の純水をまかなうことができず、止むを得ず業者から純水を“籐巻きびん”で購入したものである。それでも足りない時があり、あちこちの研究室にお願いして、もらい歩いたりした。“籐巻きびん”をかついで2号館の階段を上り下りしたので、私の足が強くなったのもそのためではないかと思える。

学生実験用の硫酸、塩酸、硝酸及びアンモニア水なども“籐巻きびん”で購入し、これを3ℓや5ℓの適当な試薬びんに移し変えて使った。移しかえるときの塩酸やアンモニアの蒸気で、大変苦勞した思い出がある。大部屋の実験室内には“籐巻きびん”がたくさん置いてあった。

その当時の工化実験は現在と大変異って、各専門分野にこまかくわかれていた。珪酸塩化学、電気化学、化学工学、燃料工学、油脂化学、繊維素化学、有機合成化学などである。学部一・二部の時代であったから毎週水木金は昼から夜の10時頃まで続いた。現在とはちがって、各パートは1人または2人の先生（助手を含む）で運営され、若い時代とはいえ、夜実験が終るとかなり疲れを感じたものである。現在は“籐巻きびん”は余り見かけなくなった。



学生大会の一コマ

昭和30年代の 学生生活



こんななごやかなひとときもしばしば



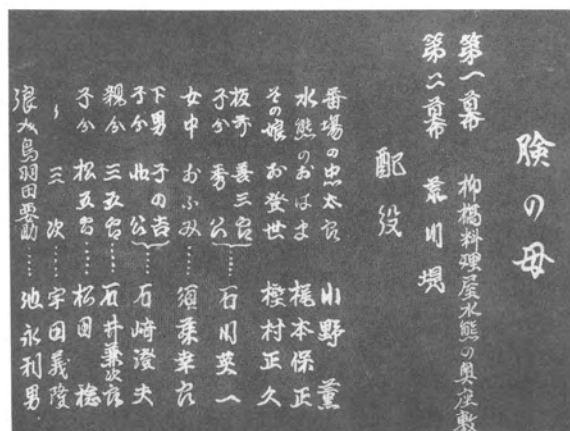
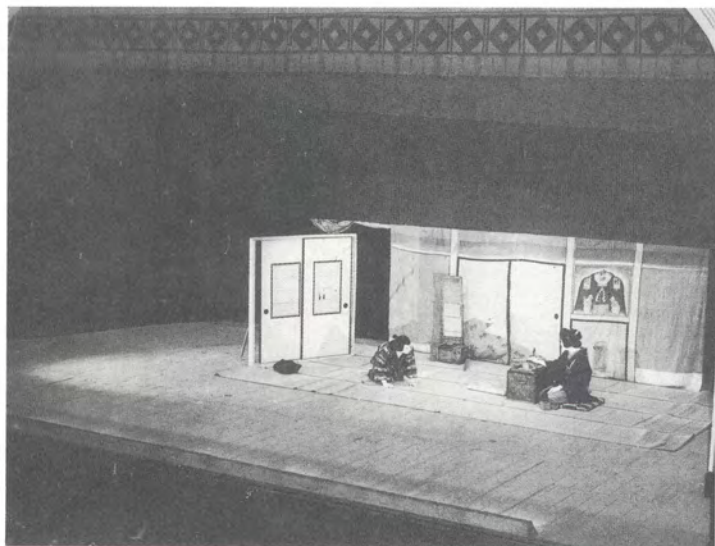
学生ホール



食堂

工学祭スナップ

戦時下の芸能祭



昭和16年に第10回の工学祭が行なわれた。芸能祭は神田共立講堂で催され、演技はなかなかのものであったという。このように芸能祭は毎年共立講堂で行なわれ、これをみにくる学生や一般の人を含め、いつも超満員であった。

座席への誘導に応援団の学生があたっていたような記憶がある。(専工2期生アルバムより)

戦後の風景

終戦後の数年はダンスが大変流行したものである。

右の写真は昭和22年の工学祭のときに催されたダンスパーティである。残念ながらその場所は明らかでない。





昭和16年頃



昭和29年



昭和29年

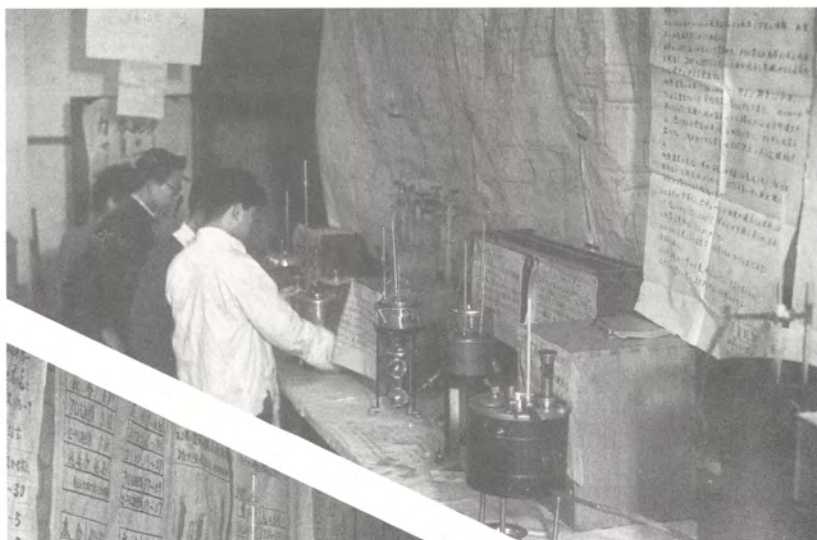
工学祭の前夜祭

前夜祭として仮装行列が行なわれた。
2号館前での様々な催しである。



昭和29年の工学祭・芸術祭（共立講堂）

駿河台・工化・2号館内の展示（昭和26年）



当時は、燃料化学研究会、珪酸塩化学研究会、染料化学研究会、電気化学研究会、その他数多くの学生自身で運営する研究会があり、専門の先生を顧問として工場見学や工学祭の研究・実験展示など活発に行っていた。

現在のような情報過剰の社会でなかったため、展示会には中学・高校生だけでなく、多数の父兄が見学に来て、研究会の学生に質問をあげせ、学生もその時に備えてよく勉強していたように思う。

その当時は化学会社からも積極的に展示品を貸し出したものである。



2号館1階の実験室における展示



三島教養部の学園祭（昭和32年）

工学祭風景 （昭和32年～）



工学祭前夜祭（駿河台） —昭和33年頃—



昭和42年 燃料化学研究会ロケット班 (会長 丸石隆男), 工化科2号館前にて
市川良正教授, 穴澤一郎助教授, 植竹和也講師と研究会メンバー



34年頃の工学祭 (2号館22講堂)



“なるほど”

10月31日

今夜は準備で寝られねえや



工学祭市川先生講演



永井、市川、中原先生
会場見学

研修旅行



教養課程を終えて駿河台校舎へ移行してくると楽しい親睦旅行が待っていた。



短期大学部応用化学科親睦旅行の一コマ（昭和30年頃）